

6J-8

英日翻訳におけるハとガの選択

風斗 博之 (NTT通研)

1.はじめに

英日間の翻訳において、「ハ」と「ガ」の選択の問題は、日英方向でのゼロ代名詞の取り扱いと並んで、談話処理が大きな比重を占めると考えられている問題である。本研究では、英文中の主格名詞句が日本語文中の同じく主格名詞句に翻訳される場合に限定して、「ハ」と「ガ」の適切な選択を行う方法を提案する。素性等を用いて統語的に記述できる条件と、前後の文脈や言語外の知識を用いて記述されるいわゆる談話的条件を区別し、それぞれを具体的な形で示して行く。

2.「ハ」「ガ」の基本的な用法

久野によると「ハ」と「ガ」には次のような用法がある(「水が飲みたい」における対象格のガは除いている)。

主題のハ	鯨ハ哺乳類です。 太郎ハ私の友達です。
中立叙述のガ	太郎ハ毎日さんぽをします。 太郎ガ見舞いに来てくれた。 雨ガ降っている。 空ガ青いね。 大変だ、太郎ガ病気だ。
対照のハ	[太郎はキムチを食べる 花子ハタクアンを食べる。]
総記のガ	[だれがキムチを食べるか 太郎ガキムチを食べる。]

3.統語的条件

主題のハと中立叙述のガを中心に久野は次のような観察をおこなっている。

- 「主題は文脈指示の名詞句か総称名詞句でなければならないが、対照を表す「ハ」に先行する名詞句にはこのような制約がない。」
- 「中立叙述の「ガ」は述部が動作を表すか存在を表すか一時的な状態を表すかの場合に限られる。」
- 「主題のハと中立叙述のガの対立は一部の従属節内では中和され「ガ」が用いられる。」

英日方向の翻訳における「ハ」と「ガ」の選択

を決定する統語的な要因は次の3つである。

- 主格名詞句の種類、特に、定/不定に関する区別
- 述語の種類、特に、一時的動作・存在・状態/習慣的あるいは恒常的動作・存在・状態の区別
- 主節/従属節の区別、従属節の場合、接続詞の種類

1、2については表1、2のようにまとめられる。アル+名詞は定名詞句と他の不定名詞句の中間的な条件付けとなる。これらの名詞句・動詞句の種類に関する情報は英語における表現をもとに与えられる。

表1 主格名詞句の種類と動詞句の種類

動詞句		(一時的)			(恒常的)		
名詞句							
定名詞句		ハ、ガ			ハ、ガ		
不定名詞句	アルN	ガ			ハ、ガ		
	裸のN	ガ					
	誰(カ)	ガ			ガ		

表2 動詞句の種類

習慣的動作 恒常的状态 ↑ ↓ 一時的動作・ 状態・存在 (眼前描写)	学生です 親切である 毎日本を読む 背が高い
	青い 英語ができる 酒が飲める 好きだ 机の上にある
	きのう家に来た 今本を読んでいる 病気です 来た

但し、「全員」「多く」等のように否定文においてハとガの選択によって論理的意味を変えるものはこれらと異なる条件付けが与えられる。

動詞句の分類については一時的な動作や状態をあらわすもの、習慣的な動作や恒常的な状態を表すもの、およびそのどちらにもなりうるものの3種にわ

けられる。このうち最後のものは談話解析等によって、いわゆる眼前描写であることがわかれば一時的な動作や状態をあらわすとみなされる(「あつ、空が赤い」等。又、分類が副詞によって左右されることもある)。“The door is closed”はこのままでは現在の一時的な状態をあらわしているが“at 10 o'clock”等の副詞が付くと習慣的な動作をあらわすと考えられる。

3については表3のようになる。久野の言う「中立叙述のガと主題のハが中和されガとなる」のはB類の接続詞に導かれる節である。

表3 接続詞の種類

A(主語なし)	ナガラ(継続)、ツツ
B(主題なし)	コト、ナガラ(逆接)、ナラ、トキ、連体修飾節
C(主題あり)	ガ、カラ、ノデ、ケレド、ト

名詞句、動詞句、接続詞の分類は、統語範疇に素性を導入することで得ることができる。

4. 談話的条件

対照のハ及び総記のガの用いられる条件は統語的に規定できるものはあまりなく(ただし、「誰」「誰か」については主題だけでなく対照のハもとらない)、主に談話内で規定されなくてはならない。

対照のハはその対照性をどう形式的にとらえるかが重要となるが、典型的なパターンは次のようである。

[太郎はキムチを食べる。
花子ハタクアンを食べる。]
[太郎はキムチを食べる。
花子ハキムチを食べない。]

即ち、先行する文に対して、並列的な意味関係を持ち、文内の主語を含めて2個の異なる要素があり、残りの部分が共通な場合である。このパターンは、拡張されて、次のように使われうる。

[田中が大学に入学しました。
山田ハ会社に就職しました。]

総記のガの典型的なパターンは次のようである。

[誰がキムチを食べるか。
太郎ガキムチを食べる。]

即ち、話者(あるいは聞き手)にとってある命題を満たす個体が何であるのかが問題となっており、その文の発話によって解答が得られた場合である。先

と同様、このパターンは推論によって、次のようなケースにも拡張して適用される。

[誰かがキムチを食べた。
太郎ガキムチを食べた。]

さらに拡張されて、対照のハと重なる場合もある。

[太郎は花子を愛していない。
二郎ハ/ガ花子を愛している。]

但し、次の例はさきの対照のハに関する条件は充分ではないことを示す。

[太郎は花子と結婚しなかった。
二郎*ハ/ガ花子と結婚した。]

従って、主語を他のものと置き替えた命題が真とならないことが分かっている場合は除外しなくてはならない。

表1に見られるように、定名詞句と一時的動作・状態をあらわす動詞句との組み合わせの時、主題のハと中立叙述のガの両方が可能である。すでに述べたように眼前描写である場合、中立叙述のガが選ばれるがそうでない場合、次の例に見るように、動詞句の一時的性/恒常性についてのさらに細かい区別、或いは動詞句が記述する内容の文脈内における予測可能性に依存する。

[私の研究室に田中というまじめな学生がいます。
その学生[*ガ/ハ]今研究に励んでいます。]

[私の研究室に田中というなまけものの学生がいます。
その学生[ガ/ハ*]今研究に励んでいます。]

[昨日、電車で大学時代の友人に会いました。
その友人[ガ/*ハ]今家にきています。]

[昨日、電車で大学時代の友人に会いました。
その友人[*ガ/ハ]今所沢に住んでいます。]

現在の英日翻訳では、定名詞句にハ、それ以外にはガを付与するといった方法や、主節の要素であればハそして従属節の要素であればガを付与するといった単純な方法がとられているが、上にのべた統語的条件によれば、より肌理細かな訳し分けが可能である。少なくとも極端に不自然な選択は避けることができる。また、談話における対照性、焦点(総記)のパターン認識、言語外知識、予測可能性についての推論などを用いればより適切な選択をおこなうことができる。

参考文献

- [1] 久野すすむ 1973、『日本文法研究』
- [2] 野田尚史 1986、「複文における「は」と「が」の係り方『日本語学』vol.5